

## 透析現場を悲劇の演目にしないうために

はまゆう会新王子病院

市丸喜一郎

人類は、ホモ・サピエンス(考える存在)であるが故にホモ・パティエンス(苦悩する存在)でもある。この両者を少しでもつなげて矛盾を昇華するために、人はホモ・ナランス(物語を語る人)として心の軌跡を他者と共有することを求めるのである。精神・心理学者ピエール・ジャネは、「語りが人類をつくりあげた」とも述べている。



透析医療に従事して43年になる。基礎医学を志したこともあったが、学園紛争を機に、臨床医となるために麻酔学と消化器外科を学びつつ、当時黎明期にあった透析医療に携わるようになった。そこで私を育ててくれたのは、この道の開拓者たちであり、雑居ビル同然の透析現場と数少ない書物、そして何よりも当時の試行錯誤の診療に耐え、不安を抱きつつも未熟な我々を温かく見守ってくれた患者たちであった。

透析医療従事の終括期を前に、ふと目にした報道番組に触発されて、一人ひとりの透析患者の話をじっくりと耳を傾けるべく「透析患者の語りの会」(以下、「語りの会」)を思い立った。以来9年間、スタッフの自発的協力を得て、自ら聞き手となり月1回のペースで「語りの会」を続けている。

語りの場において、聞き手は「これまでの人生で、あなたが経験されたことをお話しください」といった主旨に沿って、診察室以外のリラックスした雰囲気の中で「語りの会」への賛同を謝し、

映像・音声収録の許可を得た後に、患者の体調を尋ねることから始めている。その際、聞き手が患者の語りに解釈や解決を示唆せず耳を傾けていると、数分後には患者のこれまでの喪失体験といかに生きなおしてきたかの人生の物語が語られる。

当初「語りの会」は、より詳しい彼らの喪失体験と再生の物語という、三人称的情報収集を目論んでいた。しかし回を重ねるごとに、語り終えた患者が、自らの重荷を降ろしたような晴れやかな表情になり、「楽しかった」「よかった」「ほっとした」などの言葉をもらすことに気づいた。また、聞き手がひたすら肯定的傾聴に徹していると、いつの間にか語り手に釣り込まれて自らの人生を語っていることさえある。このように「語りの会」は、語り手と聞き手の間に融和な雰囲気醸し出し、ひいては医療現場にとっても好ましい変化をもたらしたのである。

人は自らの人生を問うために、3度 فرانクルの著書を読むと言われている。私が初めて手にしたフランクルは霜山徳爾訳の『夜と霧』であったが、若かった私にはジェノサイドの言葉の意味と当時の状況把握に苦しんだことを記憶している。その後「語りの会」を取り組むようになり、池田香代子訳『新版 夜と霧』とその関連書を精読した。そこには、人生はどのような状況でも意味があり、その意味への意志について明確に述べられていた。とりわけフランクルの言葉の中で心惹かれたのは、「何かが、誰かが、あなたを待っている。あなたがどんなに人生に絶望しても、人生があな

たに絶望することは決してない」という名言であった。このように、「語りの会」の趣旨が変化してきていることを感じていた私には、辛い透析生活について患者が語ることの意味を問い直すきっかけとなった。そして「語りの会」が、医師と患者の二人称的対話へ、さらに患者が自らの人生を自分の言葉で物語ることで、それぞれの人生を改めて問い直す、一人称的な意味を持つ場となっていることに気がついたのである。



先頃、75歳男性、透析歴35年の患者より『『語りの会』は、患者本人をカタルシスへ導いてくれるのではないか』との感想を頂いた。カタルシスとは、広辞苑(第5版)によると「悲劇を見て恐怖や哀憐を体験することで、鬱積した感情から解放され快感を感じる臨床心理学上の心の浄化法」と記されている。加えて、演者と観客が共に感情を分かち合う意味も含まれている。

当該患者の意味するカタルシスとは、「医師をはじめ関連スタッフは、患者の悩みや不安を受け止めてくれる存在である。お互い本音で話し合える関係を築き、患者の抱える幅広い生活上の問題や精神的悩み、不安を聞いて頂きたい。話すだけでも気持ちが軽くなる。医師が自分のことを聞いてくれることは、1回の『語りの会』で透析の精神的辛さのすべてが解消されるわけではないが、辛い中でもそれに耐えて頑張っていこうという意欲が生まれる。単なる治療対象ではなく血の通った1人の人格者として認められることは、心の糸で結ばれる喜びとなり、あたかも宗教上の祈りの対象が自分に寄り添い、見守ってくれているような癒しを感じる」といった、含蓄に富む要旨であった。

ただし、医師は聖職者ではない。フランクルは、医師と聖職者による心と魂の癒しの中で「医師は、

人間が何かを求めていることを確認するだけであって、何を求めているのかを医師のほうから決定することはできない」と指摘している。しかし、患者が自らの苦しみや病を語り、それに耳を傾けてくれる人が存在することで、心を癒され自らの人生の意味を問い直すきっかけを掴むことができるとすれば、「語りの会」において我々医療従事者が、彼らの人生の物語にじっくりと耳を傾けることには大きな意味がある。

透析医療現場を劇場にたとえるならば、患者の苦しみが多い人生の物語を通して、あるいはカタルシスという心の浄化法を介して、患者と医療関係者は共に感情を分かち合えるであろう。医療者ではない村上春樹も、地下鉄サリン事件の被害者の語りを収載した『アンダーグラウンド』の中で、「人々の語る話にしばらくの間耳を傾けていただきたいと思う。いや、その前にまず想像していただきたい」と述べている。透析現場を悲劇の演目にしないためにも、医療従事者は単なる治療対象者として患者に接するのではなく、それぞれの持つ意味のある人生を理解し、より良い人生を迎えられるように、患者の語る人生の物語に耳を傾けて頂きたい。

#### 【参考】

- ▶ ヴィクトール E.フランクル：意味への意志．山田邦男，監訳．春秋社，2002．
- ▶ ヴィクトール E.フランクル：【新版】夜と霧．池田香代子，訳．みすず書房，2002．
- ▶ 諸富祥彦：知の教科書 フランクル（講談社選書メチエ）．講談社，2016．
- ▶ マイケル・コーバリス：意識と無意識のあいだ（講談社ブルーバックス）．鍛原多恵子，訳．講談社，2015．
- ▶ 村上春樹：アンダーグラウンド（講談社文庫）．講談社，2014．
- ▶ 市丸喜一郎：日透析医会誌．2015；30(2)：262-70．